

おわりに

「はじめに」(14ページ)に掲げた九つの問いに順に答えながら、アチエの被災と復興の九年間を振り返り、アチエの被災者に見られた「思いのほか明るい表情」の意味について考えてみたい。

「アチエの沿岸部に住む人々は津波の危険性について知らなかったのか」。アチエの沿岸部に住む人々は、津波の危険性について知らなかった。アチエとその周辺地域に住む人々は過去に津波を伴う地震を経験していたが、その経験は現在を生きる人々にはほとんど伝えられていなかった。また、一部の専門家や政府関係部局のあいだではアチエ沿岸部における津波対策の必要性が指摘されていたが、具体的な対策はとられていなかった。

「インドネシア国軍はなぜ外国による支援活動を妨害しようとしたのか」。二〇〇四年のアチエは地震・津波の直前に戒厳令下であり、人道支援や報道を含めて外国人の立ち入りは制限されていた。外部世界の目の届かないところで、インドネシア国軍によるGAM掃討作戦が行われていた。戒厳令下のアチエでは、国際社会で受け入れられている人権などの規範と必ずしも一致しない独自の規範が通用しており、困り込みを解除して政府や治安当局と異なる規範を持つ勢力をアチエに立ち入らせることは、インドネシア国軍や政府の正統性に対する脅威となる懸念があった。政府や治安当局にとって望ましいのは、外部世界の支援を受け入れつつ、その



アチエにて、2005年以降に撮影

活動や資金の管理を独占することだった。それゆえに、外部からアチエに入った報道や人道支援関係者は自分たちの活動が歓迎されていないとの印象を持つことになった。

「日本のNGOの緊急・復興支援はアチエにとって本当に意味があったのか」。アチエの緊急・復興支援に参加した日本のNGOはアチエの復興に重要な役割を果たした。日本のNGOは、欧米の人道支援団体と比べて規模が小さく、国際人道支援業界におけるプレゼンスも決して大きくない。このため、国際人道支援の原則を積極的に担い、支援対象者のニーズ調査を踏まえ、公平性や平等性を明示して事業を実施した。また、支援対象地の政府当局の意向に従うと同時に、正規軍を含めた軍事勢力と距離を置くという原則に従った。紛争地は支援対象としない立場を明確にし、インドネシア国軍により立ち入りを禁じられた地域には立ち入らず、隣接した地域で災害被災者支援事業を実施した。その結果、紛争地として囲い込まれていた地域を開放した。これはNGOの直接の目的から外れているためにNGOによる評価では言及されないかもしれないが、一歩引いたところから見たときにはこのような意味もあった。

「被災者たちが外国からの支援者を楽しそうに迎えていたのはなぜか」。被災者たちは多くの支援者たちの想像と違い、明るい表情を見せていた。この背景には、被災を契機に、アチエが被災前に長らく直面していた課題である孤立から解放され、多くの人々が出入りする社会になったことがある。被災はアチエに外部世界との新たな繋がりをもたらした。被災は人々から多くのものを奪ったが、同時に、新しい関係ももたらした。アチエの外から来た人々を交えて進められる復興には、被災した人々の個人個人の復興との食い違いも生じるが、食い違いから生まれる違和感を機知とユーモアによって笑いかえ、地元社会の中で話題として共有する知恵やたくましさも見られた。被災前のアチエは紛争によって深い亀裂が生じており、社会の中で共有できる話題が限定されていた。被災は、アチエ社会の内部で共有できる話題ももたらした。こうしたなかで、人々の表情の明るさを理解することができる。



「津波の犠牲者はどのように埋葬され、どのように弔われたのか」。津波の犠牲者の多くは、遺体の身元を確認できないまま集団埋葬地に埋葬された。集団埋葬地に墓碑は立てらず、集団埋葬地は社会全体で津波犠牲者を弔う場となった。こうした社会全体での弔いでは埋められない思いを抱える人たちは、それぞれのやり方で身近な人々の喪失を思い、弔う工夫を重ねている。

「支援団体が建てた復興住宅に空き家が多く見られたのはなぜか」。アチエではおよそ五〇万人が住宅を失い、一二万戸の住宅が復興支援事業を通じて再建されたが、支援団体が建てた復興住宅にははじめのうち空き家が多く見られた。支援者は供与した住宅に人が住まないことを約束違反と考えるし、空き家が生じるような住宅再建は失敗であったと見えるかもしれないが、空き家が生じるのには、支援団体によって再建された住居に入居できるのは権利者か権利者の親族でなければならないという支援団体の決まりを住民が忠実に守ったなどの理由があった。

「インドネシアの他の地域の人々はアチエの被災をどのように受け止めたのか」。アチエの被災はインドネシアの他の地域の人々にとって、従来の「フアナティックなアチエ人」像を修正するきっかけとなった。現地入りの報道や人道支援関係者を通じて、これまで紛争のために閉ざされ、「あぶない土地」と認識されていたアチエの具体的な姿がインドネシアのほかの地域でも共有されるようになった。アチエの被災はインドネシアのほかの地域の人々とアチエの人々にともに克服すべき課題としてあらわれ、実際に協業する経験をもたらし、た。

「外国にいる私たちはアチエの経験をどのように知ることができるのか」。アチエの被災と復興の経験は、外国にいる私たちにとっても、アチエを実際に訪れることによって知ることができるようになっていく。アチエでは被災と復興の経験を外国の人たちに理解してもらえ、形に変えることで、自分たちと世界との繋がりがより豊かになることが期待されている。アチエを実際に訪れた人がたとえ地元の言葉がわからなかったとして



も、被災の衝撃と復興の進展がわかるように津波遺構が残されているし、津波博物館は建物そのものが津波被災の跡をたどれる構造になっている。デジタル化とデータベースによりアチエに行かなくてもアチエの様子がある程度わかる仕組みも作られている。

「津波と復興を経てアチエの人々や社会はどのように変わったのか」。津波と復興を経てアチエの人々や社会は大きく変わった。紛争下にあったアチエが抱えていた世界との繋がり、アチエ社会内部の亀裂、インドネシアのほかの地域との亀裂が修復され、新しい関係がつけられるようになった。人道支援がアチエに持ち込んだ新しい考え方に馴染んだ津波後世代が登場し、自分が生き残ったのはなぜかを考えながら、被災と復興の過程を世界に伝えていこうとしている。

これらの問いを総合して巻頭の答いに答えるならば、アチエの人々が被災後に思いのほか明るい表情をしていた背景には、紛争に長年にわたり苦しんできたアチエの人々が、被災が新しい関係を切り開く契機となっていることに強い期待を寄せていたことがあり、同時に、アチエに支援のために現地入りした人々の活動がアチエの人々の期待にこたえつつあったということかもしれない。

社会の復興と個人の復興

内戦下で他の地域と切り離され、閉ざされていたアチエは、被災をきっかけに世界に開かれ、インドネシア国内の他の地域からだけでなく世界中から人々がアチエを訪れ、アチエの復興・再建に関わることになった。

災害からの復興を考える上では、個人の復興と社会の復興がそれぞれあることを考えなければならない。災害は、個人的な経験であるとともに社会的な経験でもある。一人一人がそれぞれ異なる被害を受け、それぞれ異なる復興の過程を歩むとともに、社会全体で被害を受け、社会全体でも復興の過程を歩むことになる。社会全体の復興においては、制度やインフラのような社会全体が共通に直面している課題への対応が進められる。



それゆえに、災害からの復興においては、社会全体の歩みと一人一人の歩みに食い違いが生じることになる。これは、アチエに限らず、社会全体で取り組まなければならない課題に直面した社会が必ず経験することである。これに加えて、アチエでは国際的な復興支援事業が展開する中の復興過程となったことで、この食い違いがさまざまな場面であらわれることになった。それにもかかわらず、これらの食い違いが表面化して深刻な亀裂をもたらすまでには至らなかった。このことをどのように考えればよいのか。

「援助のツナミ」への懸念——支援は適切に行われたか

この問いは、アチエの復興支援は適切に行われたのかという問いと重なる。アチエの復興再建事業は外部から多額の資金が投入され、アチエの外から来た人たちが多数参加する中で進められた。「援助のツナミ」と呼ばれるほど、多数の支援事業が実施され、支援者が事業地や被災者を奪い合う「支援競争」ともいうべき状況が見られた。こうした状況下で行われたアチエの復興再建支援事業は、支援者の質と支援の質の二つの面で評価が問われた。

支援者の専門性や経験という点で、支援者の質は多様だった。たとえば、アチエの復興支援には多額の寄付金が集まり、もともと緊急人道支援を専門とする団体が復興支援事業を手掛けるようになった。また、アチエの復興支援をきっかけに支援事業を行うようになった団体や人々もいた。このことを踏まえてアチエの復興支援は適切に行われたのかという問いに戻るならば、支援事業の専門性という観点からみて、「支援の素人」ともいうべき人々が支援者としてアチエで事業を展開し、さまざまなニーズ調査やさまざまな引き渡しを行って支援の質を悪くしていたのではないかと懸念があった。

支援者は、通常、事業の平等性や公平性を確保するためにさまざまな規範を持っている。特定の個人を恣意的に支援することを避け、たとえば、所得が低い、寡婦である、子どもがいるといったように条件を付けて援助対象者を定める。支援対象者にグループをつくらせ、個人ではなくコミュニティを対象にした支援を行う。



一つの支援事業の中では、支援対象者に対する支援内容は平等にし、供与した家や資材が他に譲渡されることは禁止する。ただし、多様な支援者が支援事業を行うなかでは、こうした人道支援の規範から外れた事業も行われた。^{*1}

援助が短期間に集中的に行われ、外部からの支援者が復興に関与する度合いが高くなると、被災した社会の実情にそぐわない支援の押し付けや支援事業への依存が生まれやすくなる。これを防ぐため、復興期の「外助」においては、地元文化への配慮にくわえて地元社会にあった社会保護のメカニズムの再建がはかられることが期待される。^{*2} アチエの復興支援事業でも、外からの支援が地元社会や被災者の自立的な復興を妨げるのではないかと懸念があった。^{*3}

地元社会の対応——逸脱か調節か

これに対して、アチエではさまざまな形で外部からの支援を調節する試みがされていた。その一つの対応が第2章で検討したポスコである。外部からの支援者がコンソーシアム型の支援を組織することで公平性や平等性を確保し、支援の質を維持しようとする一方で、地元社会はポスコを組織することでコンソーシアム型支援では対応できない問題に対応した（第2章）。支援の重複を避けることで広い範囲に効果的に支援を行おうとするコンソーシアムの考え方に対して、ポスコは支援をやりとりする窓口を何通りにも設置することで支援をやりとりする機会を増やそうとする地元社会の戦略である。一人の人が複数のポスコに登録することもできるため、支援の二重取りを招くこともあるが、行政単位で行われる支援から漏れてしまう他村への避難者や自宅避難者にも支援が漏れなくいきわたるための仕組みとして十分に機能していた（第3章）。

個別の支援現場では、公平性や平等性の理念のもとで進められる住宅再建や生業支援事業だけでは十分に対応できない問題があることが明らかになっていた。そのなかで、トルコ村のように住宅を再建しても空き家となる事態も生まれていた（第6章）。しかし、空き家となっていたのは支援事業者が供与した住宅の譲渡を認め



なかった場合であって、住宅の譲渡や転用が可能になると、中国村のように住民が入れ替わりながら復興住宅が活用されていた。譲渡や転用は支援の原則から考えれば逸脱であるが、外部から来た支援団体は事業期間が終わると撤退するため、このような逸脱は許容されていた。このような逸脱が生じることは外部から支援事業を行うことの限界であるともいえるが、他方で、逸脱が許容されることで地元社会による調節が可能となったとみることができる。

地元社会が本来担うべき復興を外部からの支援者が肩代わりした結果、地元社会の自立的復興を遅らせたのではないかという指摘や、外部から持ち込まれた人道支援の考え方は地元社会の伝統的な相互扶助の考え方になじまなかったのではないかという懸念については、中長期的な観察にもとづいて評価する必要がある。^{*4}第9章でみたように、復興再建期に成長した津波後世代には、公平性や透明性の理念を実際の支援事業の中で見聞きし、それを踏まえて新しい社会の実現をめざす人々が生まれつつある。

こうした状況を可能にするうえで、復興再建庁（BRR）の役割は大きかったと思われる。BRRは特定のミッションの実現のために一定期間だけ機能する暫定的な機関で、終わりがあることが最初からはっきりしていた。その限りにおいて、専門性にもとづき実力主義で地域の外からの人材も投入しながら実動部隊が組織さ

*1 たとえば第6章第1節のヌルガハヤの事例。ただし、アチエの住宅再建事業の遅れや引き渡しをめぐる問題の背景には、短期間に大量の住宅建設が行われたことによる建材不足や労働者不足もあった。

*2 [Christopoulos & Teena 2012] は在来社会保護のメカニズムの再建に資するものになっていたかどうかという見地からアチエ津波被災地復興支援の評価を試みている。

*3 津波被災地支援について、外部からの支援のネガティブな側面を意識した研究に「真崎 2010」「佐伯 2008」「佐藤 2008」がある。

*4 被災前の状況に戻せばよいとは限らない。被災が被災前の社会の課題を露わにすると同時に、被災が地域社会に新たな戦略や組織化の契機を与え、住民が被災後の状況に柔軟に対応することで住民の力を強めていく側面に注目した研究としては、二〇〇四年スマトラ島沖地震・津波被災地となったタイの土地問題の事例を扱った「佐藤 2008」がある。



れた。

BR Rは、アチエで支援事業を行う団体に対してファシリテーターとして支援に必要な情報を提供すると同時に、支援団体の情報を求めた。また、支援を求める被災者に支援者の情報を提供した。ポストとコンソーシアムの両方の側面を持った情報共有のハブとして、アチエの復興再建事業が誰によりどこでどう行われているかを整理して公開することで、多様な支援団体の活動を互いにモニターできる状況をつくった。アチエの災害は未曾有の災害であり、復興は世界が注視する中で進められた。BR Rは支援団体に対する強制力を持つていなかったが、情報の共有と公開を通じて、多様な人々によって取り組まれるアチエの復興再建事業を緩く方向付けしていたといえる。

アチエの被災の経験は、第1章でみたように、情報の偏りや不在が被害を大きくさせることや、救援復興にあたつては情報が必要であることを人々に認識させるものだった。復興支援事業を進めるにあたつて情報拠点であるBR Rが調整機能を持ちえた背景には、情報に対するこうした認識もあつたと思われる。

亀裂の共有と修復

社会全体の復興と個人の復興の進み具合に食い違いが生じるのは、物理的復興の分野だけでなく、精神的復興や社会関係の復興においても同様である。災害は人々のリアリティに亀裂を入れる。被災は社会の様相を変え、被災前の社会と被災後の社会との間に断絶をもたらす。また、同じ災害であつても被災の状況は一人一人に異なる形であられ、被災した人と被災しなかった人の間で、また、被災した人どうしの間でもリアリティは異なってくる。さらに、災害によって突然家族や知人を失った者は、亡くなった犠牲者と生き残った自分との間に生じた亀裂をどのように受け止めればよいかという課題に直面する。そして、こうした亀裂は人々に自分がこの世に生きてあることの社会的意味を見失わせる。^{*}

被災前に内戦下にあつたアチエでは、これに加えて被災前から人々は三つの亀裂に直面していた。アチエに



は戒厳令がしかれて他の地域との交流が制限され、インドネシアのほかの地域とも切り離されていた。アチェ社会内部では、紛争に巻き込まれて亡くなった人を社会として弔えないという状況を招いていた。

津波後のアチェでは、このようにさまざまなレベルで生じる亀裂を修復する試みが見られた。第4章では、津波に被災した自分たちの状況を機知とユーモアにより対話の材料にかえ、言葉や文化を同じくする者どうしで共有している様子を見た。被災と復興の現場で生じる不満や違和感を個人で抱え込まずに笑いに変えて社会で共有することで、被災した人と被災していない人、支援する人と支援される人、個人の復興と社会全体の復興の間で生じる亀裂を克服しようとしていた。これは、被災した者どうしで共有できる心情を確かめ合うことでもある。

第5章では津波後の死者の弔いについて見た。身元を確認できないまま大勢の人を埋葬せざるを得ない状況の中で、アチェでは集団埋葬地という新しい方法を取り入れることで津波犠牲者は弔われた。集団埋葬地は、大勢の人々が不慮の死を遂げた際に、特定の誰かにその責めを負わせないことによって犠牲となった人たちの死を社会で共有し悼むための工夫である。集団埋葬地による弔いによつては埋められない思いもあり、個人として犠牲者を弔う試みはそれぞれによつて静かに続けられている。しかし、ムラクサの集団埋葬地の扉の言葉には、誰かを責めることによつて埋められない思いを晴らすのではなく、生き残った自分たちの生き様を通じて亡くなった人たちの無念を受け止めるという覚悟が示されている。このような集団埋葬地のあり方は、紛争

*5 これに関連して、『Daily & Youth 2012』は大規模な災害に見舞われた社会のコミュニティの復興・再建には、被災前の社会で共有されていた文脈や価値体系との連続性を維持することが重要であるとする。ただし、連続性を維持するといったときには、被災前社会の伝統文化を復興させることに力点があるのではなく、被災前社会の文脈や価値体系と接合させる工夫が必要であるという点である。



の犠牲となった人たちを社会として弔うことができないという津波前のアチエの課題に対応するものでもあった。

よりよい社会を目指して——災害復興を通じた社会の課題への取り組み

被災と復興の過程で生じるさまざまな違いが調節されてきた背景には、津波からの復興に被災前の社会が抱えていた課題への対応が重ねられていたこともあったかもしれない。アチエの復興・再建事業においては、アチエが被災前に内戦下にあったことから、紛争下にある被災地支援という課題に人々は挑戦することになった。その結果、被災地に対する支援事業が展開する過程でアチエの内戦は終結に向かった。このことをどのように考えればよい[＊]か。

津波被災地支援が解いたアチエの「困い込み」

アチエの歴史を紐解くと、この地域の繁栄は地域で産出される産品を域外に移出することによって支えられてきたことがわかる。古くはスマトラ島内陸部で産出する金や林産資源を東西の交易商人に売ることによって港市国家として繁栄した。その後も、コショウ、木材、丁子、コーヒーといった世界市場で売れる産品が地域経済を支えてきた。これらの産品を外部世界に届ける経路をいかに確保するかが重要であり、この経路を掌握することがこの地域を統治することだった。

アチエ王国の時代にこれらの産品を域外に運び出す経路は河川だった。アチエ北海岸部にはマラッカ海峡に流れ出る小さな川がいくつもあり、河口付近に町が作られた。それらの町は互いに競合しながら港町として発展し、マラッカ海峡の対岸にあるペナンやシンガポールといった国際交易港との取引も活発に行われていた。そうした港町の最大のものが王都バンダアチエだった。ところが、アチエがオランダの植民地統治下に入り、さらにインドネシアの国民経済のなかに組み込まれていく過程で、アチエの海岸沿いの港町は交易拠点として



の機能をしだいに失っていった。アチェは隣接する北スマトラ州の後背地となり、アチェの産品は、アチェ北海岸部と西南海岸部の二つの幹線道路を通じて北スマトラ州の州都メダンに運ばれ、そこで加工されることで初めて商品となるようになった。

内戦はアチェの多くの人々にとってアチェの産品を域外に運び出すために通らなければならない幹線道路にGAMや国軍の兵士がいて護衛料や通行料を請求されて困る事態と見えていた。支払いを拒否すれば産品は商品にならない。アチェと外部世界を結ぶ経路が海岸沿いの幹線道路しかない中で、アチェの物流は「住民の庇護者」を自認する軍事勢力によって囲い込まれた状況にあった。

津波被災を契機にアチェに多数の支援者が入域し、さまざまな事業を展開したことは、この構造を変えるきっかけとなった。第2章で見たように、国軍はアチェが「あぶない土地」であることを根拠に、域外から持ち込まれる支援物資の配給に同行したり、支援事業を代行しようとしたりして、支援事業を管理しようとした。しかし、そうした干渉をきらった支援者たちは紛争地を避けて事業を展開し、また、海岸沿いの幹線道路を経由しない自前の経路を確保しようとした。

支援の内容が多彩であったことも国軍による統制が効力を失った背景の一つとして指摘できる。外部から運び込まれるものが、毛布や食料のように誰でも運搬・運用できる物資であれば、国軍は分配を請け負うことができる。しかし、専門的な知識が必要な支援事業であれば、国軍は事業を代行することができない。津波後の

*6 なお、自然災害被災地に対する人道支援事業が被災地の紛争を必ず解消するというわけではない。アチェと同様に長年にわたる武力紛争で知られていたスリランカも二〇〇四年スマトラ島沖地震・津波の被災地となったが、人道支援事業は紛争の和解には繋がらなかった。また、二〇〇八年のミャンマー・サイクロン災害の際には、ミャンマーの軍政統治批判と国際社会による人道支援事業が結びつけて理解され、災害が「政治化」されたために国際社会とミャンマー政府の連携による災害支援の実施が滞ったことが指摘されている〔岡本 2009〕。



アチエでは、医療、教育、建設などさまざまな分野で専門的な知識を必要とする支援事業が展開され、その多くに対して国軍は干渉できなかった^{*}。国軍と政府はアチエの戒厳令を解消して、アチエ全域が支援の対象となるようにした上で、国軍は復興支援事業者の一つとして活動するようになった。

スマトラ島沖地震・津波は世界の人々がアチエに向ける関心を「紛争地」から「被災地」へと変えた。被災を契機に国内外からさまざまな人が訪れて支援事業が行われたことは、アチエの人々が域外の人々と結びつく経路を多様化し、経路の独占が困難な状況をもたらしたといえる。

このような変化を支えたもう一つの背景として、津波を契機に被災前からアチエが抱えていた内戦という課題を改善しようとした一人一人の取り組みがあったことも忘れてはならないだろう。復興再建事業に加わった人たちの中には、内戦下のアチエから域外に避難していた人たちや、紛争犠牲者の保護や平和構築の活動に取り組みながら、戒厳令を受けて域外に退去せざるを得なかった人たちが含まれていた。BRRが「被災前よりよいものを」(Build Back Better)というスローガンを掲げた背景には、繰り返し起こる災害に耐えうる社会を作るためには被災前の状況に戻す復興ではなく、被災前より良い状態を目指す復興でなければならないという防災や人道支援の考え方が反映されていただけでなく、被災前のアチエ社会に関わりを持ちながら、内戦が激化する中、志半ばでアチエへの関わりを断念せざるをえなかった人々の思いも反映されていたといえる。

こうした状況下で、津波被害の拡大や紛争下における人権侵害の責任を追及する方よりも起こった事柄を受け止めるあり方が、また、外部からもたらされる事業や情報を独占するよりは共有するあり方が、被災後のアチエで知らず知らずに選ばれていたと言ったら言い過ぎだろうか。

被災を契機に作られる新しい関係とその可能性

内戦下にあった被災前のアチエ社会は、アチエ社会内部の亀裂、インドネシアのほかの地域との亀裂、世界との繋がりやの喪失といった課題を抱えていた。復興再建事業が進められていく中では、これらの亀裂や断絶が



修復され、新しい関係が結ばれていく様子を見ることができた(第三部)。この過程は、アチェの自立的発展を支える上で必要不可欠な外部世界との繋がりと社会内部の秩序が回復される過程でもあった。

GAMと人々の間の亀裂を埋める試みは、暮らしの面では元GAMゲリラ兵士の社会統合事業という形で、また、政治の面ではGAMの政党化が進められた^{*8}。津波後にアチェで行われた復興再建事業は津波被害が著しかったアチェ西南海岸部とバンダアチェ周辺に偏って行われていたが、「被災地」の範囲を拡大解釈すること、紛争による被害を長年にわたり受けてきた北海岸部や、バンダアチェからもメダンからも遠隔にあり、文化的背景の異なる内陸部を支援の対象とする取り組みが見られた^{*9}。二〇一三年ガヨ地震に対するアチェ州の取り組みのように、スマトラ島沖地震・津波からの復興後も、第二、第三の「復興」が目指されている(第9章)。

アチェとインドネシアのほかの地域との関係についても修復が見られた。スマトラ島沖地震・津波の経験は、インドネシアの市民社会の成熟を促すきっかけとなった。スマトラ島沖地震・津波からの復興に国をあげて取り組み、さらにその後もインドネシアで大規模な災害が相次いだことで、インドネシアでは災害などの危

*7 「西 2012」ならびに本シリーズ第一巻第7章を参照。

*8 これに対する評価は中長期の視点から行う必要がある。本書では扱わない。たとえば、現在のアチエ州政府はたびたび汚職問題が指摘されており、このこととGAM元兵士を中心とするアチエ党が与党であることや、GAM出身者が州知事であることとを結び付けてGAMの社会統合の失敗と捉える向きもあるが、これはアチエのインドネシア化という観点から理解すべきもののように思われる。なお、アチエで製作されているアチエ語のコメディ映画『ウンパン・ブルエ』(Unpan Bule) シリーズは、村の「無法者」が起す騒動を面白おかしく描いて好評を博し、二〇〇六年の第一作目から現在までに十一作目までがVCDにより公開されている。粗暴で常識に欠けた「無法者」は思いもかけない騒動を引き起こして周りの者に迷惑をかけるがどこか憎めず笑いを誘う。紛争下にごこの村でもいたたろうこうした若者たちの様子を笑いにかえて楽しむあり方は、アチエの人々の度量の深さを示している。

*9 たとえばJICAが行ったアチエ州住民自立支援ネットワーク形成プロジェクトがこれにあたる。



機に見舞われた際にはインドネシアのほかの地域から誰かが助けに来てくれるという経験を重ね、インドネシア社会のボランティア社会化をもたらした。また、BRRという文民組織による非常事態への対応が成功したことにも意義がある。内戦が繰り返されることでインドネシアのお荷物扱いされていたアチェはインドネシアにとって気づきの場になりつつある(第7章)。

アチェと世界との繋がりをどう確保するかという課題をめぐっては、第8章でみたように、被災と復興の経験を踏まえて防災研究拠点や観光拠点として発展させる取り組みが続けられている。被災と復興の経験を経たアチェでは、次の三つの新しい理念が社会の自立を支える理念として期待を寄せられている。公平性や透明性を重視する人道支援の理念、災害に科学技術と社会各層の連携と協業によって対応しようとする災害対応の理念、そして、人智を越えた災いを受け止める上での精神的な支えとしてのイスラム教の理念である。これらの理念が外部世界との繋がりを豊かにし、同時に、社会内部の格差を解消したり調整したりするための秩序を構築する方向にうまく活用されるかどうかは、アチェで暮らす人々の取り組みと、それを外で見守る私たちの関わり方にかかっているといえるだろう。

世界のツナミ犠牲者追悼の地として

アチェの行く末を展望する上では、津波犠牲者を埋葬した集団埋葬地の今後の展開が注目される。アチェの集団埋葬地には津波犠牲者の遺体が埋葬されているが、実際に誰の遺体が埋葬されているのかは誰も知りようがない。そのため、ごく一部の例外を除き、一人ひとりの名前を刻んだ墓碑は置かれていない。死者の名前が記されていないことでは無名戦士の墓に通じる点があるが、^{*10}しかしながら、集団埋葬地は無名戦士の墓とは根本的に異なっている。それは、ここに眠っているのは国家のために死んだのではなく自然災害で犠牲になった人たちであることに加え、アチェが単独の国民国家ではないこと、そしてスマトラ島沖地震・津波が多くの人に被害が及ぶ災害だったことによる。アチェはインドネシアという国民国家の一州であるため、アチェ社会が



主催する儀礼は、それが公式のものであっても国家による儀礼とはならない。また、二〇〇四年のスマトラ島沖地震・津波はインド洋沿岸諸国に被害を及ぼし、さらに観光などでこれらの土地を訪れていた外国人にも犠牲が出ていることから、たとえばバンダアチエ市内の集団埋葬地にインドネシア人以外の遺体を実際に埋葬されていることがなかったとしても、これらの集団埋葬地はアチエ州やインドネシアの枠を越えた津波犠牲者が抽象化された表象となりえている。津波に耐えた木麻黄の木やモスクがあるウレレー海岸からムラクサの集団埋葬地にかけての一带が「グラウンド・ゼロ」と名付けられているところに、アチエの津波被災をアチエだけのものとせず、世界のツナミ犠牲者追悼の地として位置付けようとするアチエの人々の思いを見て取ることができる。こうしたアチエの行く末を見守ることは、社会内部の豊かさを失わないまま外部世界との繋がりを維持することは果たして可能かどうかという人類社会が長年取り組んできた課題に対する挑戦を見守ることでもある。

*10 ベネディクト・アンダーソンは『想像の共同体』のなかで無名戦士の墓が無名であるがゆえに近代のナショナリズムを支えてきたことを指摘している。ここでは、無名戦士は、国家のために死んだ者であり、成員を特定の土地や国家に結び付けて限定する共同体の象徴として機能している「アンダーソン 1997:32」。「ミニニティ形成において死者の弔いや喪失の記憶・記録が果たす役割の重要性については「鈴木 2013」を参照。

